

新作『晴耕雨読』

— コーヒーブレイク、そしてビール —

作 ■ 雨々アメ（仮）

◆ 執筆メモ

タイトルの晴耕雨読は、サブテレニアンの赤井さんが雨の日にツイッターにてつぶやいていた言葉。劇場の壁が本棚になってるサブテレニアンって劇場を知っていたら分かる通り、赤井さんはかなりの読書家なので。で、台本を最初に書き始めたのは、ピクニックというものの歴史的な背景のくだけり。こういう部分があつて、それが核となり、話というものは膨らんでいくのです。これ、執筆あるあるかも。この戯曲は、短編いくつかで、最後には全体として一つの長編に、という構造の話です。これまでも、出演者にNG日が多くても、稽古場に集まる人数が少なくなつても停滞することなく作品づくりが進んで行く、ことを前提に戯曲を書いてきているので、雨々のホンはこういう形が多いのです。

◆ 執筆に必要な人物設定

- 女1 後から起きてきた女、雨を理由に仕事を休む、読者。
- 女2 もう起きていた女、自分の本を発掘、コーヒーを入れる。作家。
- 女3 橋の上、雨に打たれて。
- 男1 橋の上、彼女を見つけて。
- 男2 本。ストーカーに間違われる。サイトウ。
- 女4 斧。よし子（仮）。
- 女5 かぐや姫に自分を重ねる。
- 男3 彼女にプロポーズ。
- 男4 昔彼女にプロポーズしたが。

■ 1. 晴耕雨読

(女1と女2の会話。朝、彼女達が暮らす住宅。高台。窓から見える景気は、都会ではなく、地方都市。町は町だが、自然も多い。窓の外にも自然が見える。過疎化が進んで、誰も住まなくなった古い住宅を借りて住んでいるのかも知れない。まだ歳ではない女性二人が暮らすには、広さだけは充分に広い印象である。一度東京に出て仕事もしていた時期があるが、今は都会を離れて時間は経っている。まあそんな感じかも知れない。)

女1 なに暗がりです、電気つけるよ。
女2 ああ、うん。

(電気が点く。舞台、明るくなる。)

女1 おはよう。
女2 おはよう。
女1 (大窓から外の庭などを見て) あっ、雨降ってんだ。
女2 (同じように外を見て) うん、降ってるね。
女1 ずっと?
女2 さあ、起きたら降ってた。
女1 何時に起きたの?
女2 5時。
女1 じゃずっとだね。
女2 うん。
女1 まだ暗かったでしょ。
女2 今もけっこう暗いけどね。
女1 ああ、うん。早いわね。
女2 なんか、目が覚めちゃって。
女1 なんて?
女2 さあ、なんでだろ。夢でも見たのかな。
女1 どんな?
女2 ー、さあ、なんか目が覚める感じだろうね、そりゃ。
女1 ふーん、じゃ目覚ましいらないね。
女2 目覚まし?
女1 時計、いつも鳴る前に目を覚ましてるじゃん。
女2 そうかなあ。ねえ、コーヒー飲む?
女1 うん、飲む。
女2 (コーヒー入れに動きながら) なんかい感じだよね。
女1 何が?
女2 雨が。
女1 雨がいい感じってどういうこと?

- 女2 えー、窓の外見てよ、いい感じでしょ？
- 女1 ー、分かんないけど、雰囲気があるのかな？
- 女2 そう、雰囲気雰囲気。
- 女1 秋のながめだっけ。
- 女2 秋のナガメ？
- 女1 ほら、古今和歌集だっけ、季語よ、長雨（ながあめ）って書いて、ながめ。
- 女2 へー。はい。（コーヒー出して）
- 女1 ありがとう。
- 女2 （自分のコーヒーを飲む）はー、目が覚める。
- 女1 今までは目が覚めてなかったの？
- 女2 うん、意外と。
- 女1 ははは。そっか。あれ？ 花火は？
- 女2 ああ、花火！ ー、いないなあ、今朝はまだ会ってない。
- 女1 ご飯あげた？
- 女2 皿が空になってたからカリカリ入れたけど。
- 女1 そっか、雨なんだから家にいればいいのにね。
- 女2 そうだね。
- 女1 そっか、そうだよね。
- 女2 どうしたの？
- 女1 いや、今日は雨だし、私も家にいよう。
- 女2 ー？
- 女1 仕事は休もうかな。
- 女2 えっ、どうして？
- 女1 今言わなかった？ 雨だからって。
- 女2 えっ、雨だとどうして仕事休むの？
- 女1 だって久しぶりの雨じゃん。
- 女2 久しぶりだから何？
- 女1 いや、だから、ほら、『晴耕雨読』って言葉知らない？
- 女2 せいこう？ 古今和歌集？
- 女1 違うわよ、晴れるって字に、耕すって書いて、雨の日に、読むって字。
- 女2 えっ、ここに書いて。
- 女1 （書く）こう。
- 女2 『晴耕雨読』。
- 女1 雨の日には働きに出ないで、本でも読もうってことよ。
- 女2 あなた、そんな身分？
- 女1 身分は関係ないでしょ。
- 女2 セレブの生活じゃないんだから。
- 女1 セレブは畑耕さないでしょ。
- 女2 そうじゃなく、私たちの話、お金稼がないと生きていけないでしょ、家賃だつて月末。もうすぐよ。
- 女1 まだ有給残ってるはず。
- 女2 ー、本当に？

- 女1 本当。それに家賃はあなたでしょ。
女2 まあそうだけど。（晴耕雨読の文字を指し）これ宮沢賢治？
女1 ん？
女2 晴耕雨読って。
女1 さあ、違うんじゃない、なんで宮沢賢治？
女2 なんか、っぽいから。
女1 っぽいかな？ 賢治さんの雨にも負けず方向だから違うんじゃない？ きつと中国の故事とか、そんな感じよ。
女2 そっか。
女1 じゃ、今日はたまってる録画いっぱいあるし、観ちゃおうかな、今期のドラマとか一個も観始めてないしね。
女2 ちょっとちょっと、本を読むんじゃないの！？
女1 本、か、んー、今読みたい本ないし。菅田将暉が主役でさ、有名女優が相手役のやつやってんじゃないん。誰だっけ、えーと・・・
女2 そりゃ菅田将暉の相手ならさぞかし有名女優でしょうよ。
女1 知らない。あの子、晴耕雨読なんでしょ。
女2 そりゃそうなんだけどね、ほら、雨の日にゴロゴロしながらテレビって言うのもオツでしょ。
女2 オツかなあ。
女1 オツよ。
女2 オツって何？
女1 んー、さあ（笑）。
女2 あの子、えーと、あつ、ちょっと待ってて、（本を持ってきて）あの子、これ読んでみる？
女1 何その本。
女2 発掘されたの。
女1 発掘！
女2 あの何年も片付けてない部屋の奥から、出てきたのよ。
女1 もしかして片付け始めたとか。
女2 んー、逆、って言うか、この間の地震で色々崩れまして、もっと酷い状態に。
女1 また？ あつ、あの地震か。久々意外と揺れたもんね。
女2 東日本大震災の余震なんだから。
女1 へー、いつまで余震続くんだろうね、びっくり。
女2 本当だね、忘れた頃にやってくる。
女1 あのさ、それってもしかして、昔書いた本とか。
女2 そう、私が昔書いたやつ。
女1 へー、どうしたの、今まで一個も読ませなかったのに。
女2 そうだっけ？ ああ、読ませなかったわけじゃなくて、探しても見つからなくて。
女1 それが地震で発掘されたと。

女2 そう、まずは1冊。
 女1 へー。(受け取ろうとするが、渡してくれない) ちよっと。
 女2 読む?
 女1 うん、そりゃ読むわよ。
 女2 本当に?
 女1 タイトルは?
 女2 『雨のピクニック』。

(雨音、急に強く聞こえ。)

女1 (窓の外を見て)・・・雨の日に、ピクニックなんて行く?
 女2 普通行かないから物語になるんじゃない。
 女1 おー、そっか。もしかして実話?
 女2 なんで?
 女1 自分の経験とかを反映させてる女流作家のイメージ。
 女2 そう? んー、実話、って言うか、違うわね、一応フィクション、参考にしたエピソードがあるってだけかな。
 女1 ふーん。面白そう。じゃ、さっそく。(手を出す)
 女2 (まだ本は渡さない) 朝ご飯は?
 女1 いらない、すいてない、あつ、コーヒーもう一杯入れよっかな。
 女2 じゃ私が。
 女1 サンキュ。

(女2、本を女1が座った場所の、前のテーブルに置くと、コーヒーを入れに行く。)

女2 (声) わつ、窓開いてる。花火! 花火? ああもう、水浸し。
 女1 大丈夫?
 女2 (声) ああ、うーん。なんか窓開いてて。

(窓を閉める音。雨音遠のき。音楽が聞こえる。女1、本を触るが、勝手には開かない。コーヒーを入れるためだけの、誰も何もしない、しばしの沈黙の間。)

女1 (しばらくしてから) やっぱ目覚ましは必要よね。
 女2 ん?
 女1 ほら、さっきはああ言ったけど、目覚まし時計、方が一起きられなかったらやばいから、やっぱ朝鳴るようにしとかないと。
 女2 えー、平気で仕事休む人が遅刻とか気にするの?
 女1 そりゃ、やると決めた時はちゃんとやる性格よ。
 女2 ふーん、よく分かんないけど。
 女1 あつ、電話しとかないとね、忘れそう。電話貸して。

女2 はい。

女1 なによ、電源落ちてるじゃない。

女2 普段切ってるのよ。

女1 困らない？

女2 たぶん、私は困らない。私に連絡付けたい人がいたら、その人は困るかも。あ、指紋認証。(受け取って、再び渡す)

女1 グメじゃん。

女2 別に構わないかなって。

女1 へー。友達なくすよ。

女2 もうけっこうなくしてる。

女1 ああ、あつそ。

(女1、電話をかける。)

女1 あっ、もしもし、えー、声で分かりませんか？ そう、沢地です。すみません、雨が降っていて、今日は出勤が出来そうに。ああ、いえ、体調じゃなく、はい、大丈夫です。ですが雨が降っていて。はい、雨です。えっ、そっちは降っていませんか？ (降っているって言われた) ですよ、で、それで、はい、それが理由です。やだ本当ですって。ははは。はい、よろしくお願いいたします。(電話を切る)電話ありがと。

女2 素直ね。

女1 何が？

女2 普通熱があつてとか、そういう理由にするでしょ。

女1 そうなの？

女2 そうよ。昨夜食べ過ぎてお腹痛いとか。

女1 でも嘘じゃん。

女2 昨夜食べ過ぎたでしょ。

女1 そうだっけ？ でもお腹はぜんぜん。

女2 よくクビにならないわね。

女1 えっ、これくらいじゃクビにはならないでしょ。

女2 楽観的と言うか。

女1 私嘘つかないし。

女2 あのね、こういう時は嘘でいいのよ、職場の人だって嘘つてうすうす分かって、詮索とかはしてこないから。

女1 なんて？

女2 なんでもよ。

女1 へー。

女2 社会常識。

女1 変な社会常識ね。

女2 変だけど、まあ変なことだらけじゃん、この世の中って。

女1 ああ、よく分かんないけど、そっか。

女2 本当に休んだね。

女1 うん、本当に休んだよ。なんで？
 女2 いや。
 女1 (運ばれた新しいコーヒーを飲んで)……。んじゃ、読みますか。
 女2 (手を出して、女1の前の本を開く)はい、どうぞどうぞ。
 女1 『雨のピクニック』

(女1、読み始める。どこかで猫の鳴き声。猫鈴も。タイトル『雨のピクニック』。しだいに大きくなる、激しい雨音……)

■ 2. 雨のピクニック

(案として、まだシーン1の二人は舞台に残っていて、窓の外とか、舞台別空間を使って、以下の場面をやってもいいかも。実はすぐに女1と女2の場面に戻るので。舞台、夜の橋の上。雨が降っている。女3が佇み、男1が登場。)

男1 あの、すみません。
 女3 ……
 男1 すみません、あの。
 女3 ……
 男1 すみませーん。
 女3 ……
 男1 あの、聞こえてますか？
 女3 聞こえてません。
 男1 聞こえてるんですね？
 女3 今のは、でもその前に何言ったのか、ぼーっとしていて。
 男1 ああ、特に何も、声をかけ続けていました。
 女3 本当に？
 男1 ええ、まあ。
 女3 何かご用ですか？
 男1 えっ、特に用は。いや、どうしたのかなって、雨降ってるし。
 女3 知ってますよ。
 男1 えっ？
 女3 傘さしてないので雨降ってるのに気が付いていないとお思いでしょうが、私降っているのには気づいています。
 男1 そ、そうですか。
 女3 けっこう激しい雨ですし。
 男1 ですよね、かなりヤバイ。いや、風邪引いちゃいますよ、びしょびしょですよ。
 女3 平気です。
 男1 平気じゃありませんって。えっ、雨が降っても濡れないタイプの方？
 女3 そんな人います？
 男1 いや、分かんないけど、河童とか。

- 女3 河童だって別に、濡れない訳じゃないと思いますよ。
- 男1 ああ、そうですね。いや風邪を馬鹿にしちゃ駄目ですよ、肺炎とかになると死ぬことだってありますからね。
- 女3 私別に、風邪を馬鹿にはしていませんけど。
- 男1 そ、そうですね、んー、だったら、じゃ、傘に入りませんか？
- 女3 傘？
- 男1 嫌じゃなかったら、近くまで送ります。屋根のある所まで。
- 女3 相合傘ってことかしら。
- 男1 いえ、嫌なら、あの、あつ、今から近くのコンビニに行って新しいの買ってきますから。
- 女3 コンビニあります？
- 男1 えっと、近くには。
- 女3 でしょ、諦めましょう。
- 男1 えっ、いや、声を掛けてここまで話してしまうと、もう後には引けないって言うか、助けないと。
- 女3 助ける？
- 男1 いや、とにかく、どっか、暖かいところまで。
- 女3 私、雨が好きなんですよね。
- 男1 そりゃ好きでしょうとも、そんな、ずっと雨の中にいるんですから。でも、どんなに好きでも、ほら、取りすぎは良くないですよ、僕もね、子供の頃、牛乳が好きで牛乳ばっか飲んで、飲みすぎて、お腹壊しましたよ、入院するレベルでした。
- 女3 何の話？
- 男1 すみません、例えば、えーと、どういったら分かってもらえますかね。
- 女3 諦めましょう。
- 男1 いや、諦めきれないんですね、そういう性格なんですよ、しつこいって言うか。
- 女3 いえ、諦めるのは私です。
- 男1 ……えっ？
- 女3 その傘に私も入りますから、半分空けて下さい。
- 男1 ああ、本当？ はい、良かった、どうぞどうぞ。
- 女3 すみませんが、肩を抱いて下さいませんか？
- 男1 肩を？
- 女3 下心はありません、傘の真ん中にギュとした方が、色々。
- 男1 はい。うわっ、冷たい。
- 女3 そりゃ。
- 男1 想像以上です。
- 女3 すみません。じゃ、どこまで送って下さいますか？
- 男1 そりゃ、どこまで？
- 女3 提案としては、私の家とあなたの家の、どちらか近い方で。
- 男1 家は近いですか？
- 女3 遠いです。

男1 じゃ選択肢一つですね、ウチまで、意外と近いんで、すみません、そこで雨宿りを。

女3 それじゃ、お願いします。

男1 こっちはです。

女3 河童！

男1 えっ！

女3 あなた私のこと、河童って言いませんでした？

男1 今？

女3 さっきはスルーしましたけど、ずっと心に引っかかってて。

男1 いや、すみません、その話は、あの、家に行ってから。

女3 (ぶつぶつ) 河童、河童って一体、どういう・・・

男1 えっと、あの、こっちはです。

(男1と女3、去る。二人は、以下のシーン3の間に着替える必要あり。)

■ 3. 晴耕雨読

女1 あのさ、実話って言ってたじゃん。

女2 ん？

女1 このお話。

女2 あくまで参考にしただけで。

女1 でもさ、このどちらかがあなたたってことでしょ？

女2 さあ、どうでしょう。

女1 男の方じゃないわよね、そりゃ。だったら傘も持たずに佇んでいた女性が実はあなた？

女2 さあ、そうとも限らないわよ、男女を入れ替えて書いたのかも、女優4人芝居を男性4人に書き換えてやることだってあるんだから。

女1 何の話？

女2 まいっか、これから出てくる新しい人物が私かも。

女1 まだ出てくるの？

女2 実は男性の家は大家族で、6兄弟の長男って設定だって考えられる。

女1 おー。いやいや、あなたが書きそうもない。

女2 知らないくせに。

女1 書いたものは知らなくても、あなたのことは少しは。あの日以来ずっと、一緒に暮らしてるんだし。

女2 ふーん。

女1 きっとこの男の人は一人暮らしで、きっとこの二人はこの夜にはエッチなことしそう。

女2 えー、しないわよ。

女1 どうして。してよ。

女2 どうしてって。してよ？ いやいや今知り合ったばかりでしょ。

女1 運命を感じた二人には、時間なんて必要ないのよ。

女2 えー、何それ、あなた変なドラマとかにはまってない？ 最近のドラマにそんなのなかったっけ？

女1 ドラマの話じゃなく、そういうことってあるでしょ、現実に、リアルに。

女2 ないない、知らない、そんな現実に私生きてない。

女1 私は、ちよっとあるからさ。

女2 あるの？

女1 ー、まあ。

女2 えっえっ、どれくらい。

女1 どれくらいって？

女2 時間、出会って、どれくらいで？

女1 えー、えっと、あん時は、・・・（思い出して計算して）ヤバイ、言えない。

女2 言えない！

女1 ごめん、想像以上に短すぎた、あーごめん、言えないレベルだった。

女2 わー、どういうこと？ 逆に想像力でなんか、私の頭の中ですごいことになってるんですけど。

女1 ごめん、本当、この話題はこれにて。

女2 秒？ 秒ってこと？

女1 ぷっ、秒な訳ないでしょ、何言ってるのよ。

女2 いや、だって、えー。

女1 ごめん、本に集中したいから、黙ってて。

女2 わー、あなたはいいわよ、本の中に逃げ込めるから、今私の中はモワモワよ。

女1 モワモワ？

女2 えっと、モワワって、フワフワじゃないし、モクモクした、ポーンヤリした状態よ、ピンク色の。

女1 分かんないけど、まあ言いたいことは。じゃ、私はあなたを置いて、本の世界へ、えっと、『雨のピクニック』、ページをめくり、場面は変わりました、この男性の家へ。

（溶暗。）

■ 4. 雨のピクニック

（シーン2のト書きの舞台案を採用した場合でも、ここからは場を変え、女1と女2は去り、男1と女3のみの場面に。）

女3、入浴を済ませて出てきた姿。パジャマ姿。バスタオルで髪を拭きながらとか。

男1も室内着か、コートなどは脱いで、リラックスした格好に。）

男1 体、温まりましたか？

女3 ええ、ありがとうございます。至れり尽くせり。

男1 いえ。

女3 このパジャマ、サイズがピッタリですよ。

男1 ですね、捨てずに取っておいて良かった。

女3 えっと、お一人で暮らしてるんですよ？

男1 ええ、そうですね、あつ、こっちにも部屋ありますんで、あの、別々に寝たりとか可能ですから。

女3 あの、言い難いですけど、言いますが、誰か、彼女さんの服とかを、勝手に着てるのか。

男1 いや、実は昔は家族がいて、出てっちゃったんですけど、まだ色々残ってる、あの、奥さんの、いや元奥さんの残していったやつですね、それ。

女3 最近ですか？

男1 いえ、ぜんぜん最近じゃ、もっと早くに片付けないといけなかったんですが、なんか放っておいちゃって。でも良かった、まさかそれが役に立つ日が来るとは。

女3 ー、じゃ、彼女のパジャマを勝手にパターンのじゃないなら、遠慮なく。

男1 すみません、お気になさらずに。何か温かいもの、入れてきますね。コーヒーか緑茶なら。

女3 じゃ、コーヒーで。

男1 おつ、実は僕、豆にはこだわってましてね、美味しいコーヒー入れてきますよ。女3 ええ、でも、豆の良さとか私分らないかも、ブラックじゃ飲めませんし。

男1 それでいいんですよ、僕は確かにブラックも飲みますけど、世界的にはブラックでコーヒー飲む国は少ないんですから、ほら、アフリカとか、むっちゃ甘いコーヒー飲む文化とかあるでしょ、インドでしたっけ？ まあ産業革命以降、コーヒーや紅茶には簡単に栄養補給するって側面もありますからね、砂糖にミルクもぜんぜんあります。

女3 そうなんですか。

男1 ええ、ちょっと待って下さい。

(男1、コーヒーを入れるに行く。音楽が聞こえている。コーヒーを入れるためだけの、誰も何もしない、しばしの沈黙の時間。)

女3 少々お聞きしますが。

男1 何ですか？

女3 この後、私たちどうなります？

男1 どうって？

女3 今夜、外は酷い雨で、男女が、一つ屋根の下。

男1 あつ、本当、何も心配しなくて大丈夫ですよ。

女3 私、魅力ないかしら。

男1 えっ、いやいや、そうじゃないけど、えっ、そういうあれじゃないでしょ。

女3 ええ、まあ確かに、そういうあれじゃないんですけど、単純にどういう計画かなって。

男1 計画って、まあ、寝ましよ、疲れてるし、別々に、僕はあっちで、だって疲れ

ているでしょ、雨に濡れるとか、なんか体力奪われるし。

女3 そうですね。ありがとうございます。ただ、今は意外と目が冴えちゃって。

男1 そうですか。

女3 コーヒーなんて飲んだら余計に。

男1 おっと、あっ、違うのにします？ 僕はコーヒー飲んでも平気で寝れちゃうタ

イブなんで、すみません、気が付きませんでした。

女3 いえ、コーヒーは、いただきます。ありがとうございます。

男1 いやー、なんかすみません。

女3 いえ。あのう、ちよっと変なこと言っていていいですか？

男1 それ以上？

女3 それ、以上！

男1 あっ、失言でした、すみません。

女3 私、ピクニックに行きたいな。

男1 えっ？ いやー、えっ？ んっ？ 外は雨だし、もう夜も深いし。

女3 だから変なことって前置きしたでしょ。

男1 はい。いや、ピクニック。

女3 急でごめんなさい。

男1 急って言うか。

女3 まあ一種の、脳内旅行みたいな。

男1 脳内。えっと、じゃイメージする感じですか？

女3 そう、そんな感じで。そもそも、ここでピクニックって言うのも、そんなに変

じゃないんですよ。

男1 変じゃないとは？

女3 さっき産業革命って聞いて、ピーンと来て。そもそもピクニックっていうのは19世紀、1802年の3月にイギリスのロンドンにあったミュージックホールで行われたのが最初で、現在私たちの頭に思い浮かぶものとはぜんぜん違っていたんです。室内だし、野山に出掛けないし、サンドイッチもおにぎりも卵焼きだつて食べない。

男1 唐揚げも？

女3 そう、唐揚げも。

男1 あイタタ！

女3 まあロンドンですしね。要するに只の集会、男女が仲良くなるのが目的だし、んー、合コンパーティーみたいなイメージかも。

男1 合コンパーティー！ それが何で今みたいなピクニックに変わっていったんですか？

女3 おっ、いい質問。キッカケはまず、1840年代に都市というものに公園が発明されたことがあげられる。

男1 あっ、公園ってものがそれまでなかったのか。

女3 なかったのね。それに50年代には鉄道が発明されて、郊外ってものが身近になつて行く。休日って概念も実はこの頃に発明された、つまり人々が仕事以外に

レジャーってことも考えるようになったのが19世紀中ごろからって訳なの。そんな中で、ピクニックってものが、だんだん今みたいな形になっていった。

男1 へー。

女3 だから、最初に戻るけど、室内の、ここでピクニックっていうのもアリっちゃあアリなわけ。

男1 へー、ミュージックホールじゃないし、若干無理やりな気もするけど、で、何をやるの？

女3 そうね、まずイメージ。

男1 イメージ。

女3 さ、何処に行きたい？

男1 えー。んー、場所は思いつかないけど、とりあえず晴れている場所ね。

女3 ふふ、じゃ、それこそ公園にしましょう、公園は1940年代の発明よ、この近所に公園ある？

男1 ある。ちよっと歩くけど、僕が時間ある時に散歩とか、走りに行く大きな公園が。水鳥公園。

女3 水鳥がいるの？

男1 あー、見たことないけど、池はあるけど。

女3 ピヨピヨ、ピヨピヨ。

男1 ヒヨコ？

女3 水鳥よ。

男1 水鳥はそんな鳴き方しないでしょ。

女3 じゃ、どんな感じ？

男1 へー、えっと、ニャーニャー。

女3 猫じゃないんだから。

男1 ウミネコって鳥いるよね。

女3 ウミネコか、海じゃないけどね。

男1 ニャーニャー。

女3 ニャーニャー。

女3 ニャーニャー。見上げれば空を飛ぶ鳥達。風を感じる。風を感じるイメージ。ソヨソヨソヨ、ソヨソヨソヨ、木々がザワザワって音を立てる。ザワザワ、ザワ

ザワ。太陽は眩しく、空の青さよ、木々の緑よ、あつ、匂いも感じてみよう。木々や花の匂いが深呼吸をすると体の中に入ってくる。大きく息を吸って！吐いて！

男1 なんだか気分爽快。

女3 それじゃ、今度は鉄道に乗って郊外へ。(スイッチを押して電気を消す。間接照明だけが残り、部屋の雰囲気の変化する)

男1 1950年代の発明だね。

女3 ガタンゴトン、ガタンゴトン。

男1 おせんにキャラメル、アイスクリームはいかが。

女3 すみません、アイスクリームを一つ！

男1 ずるい、二つ下さい！

女3 わっ、バナラ、美味しい、そっちは何味？

男1 えっと、チョコプレートかな。

女3 交換しよ。

男1 あっ、まだ一口も食べてないって。

女3 こっちも美味しい！

男1 交換だろ、二つ独占するな！

女3 はーい。

男1 おっ、確かにどっちも美味しいな。

女3 コーヒーもあります。（さっき入れたコーヒー。）

男1 おっ、コーヒー。

男1と女3（二人で）はー、美味しい。

女3 確かにいい豆かも、風味があって、あんまり苦くないし。

男1 ですよ。

女3 あっ、見て！ 海が見えてきた！

男1 海？ ピクニックって言ったら、山とか森じゃなくって？

女3 私海に行きたいなあ。ニャーニャー。

男1 ウミネコ！ よしきた、海か、そう言えばずいぶん泳いでないな。

女3 あなた泳げるの？

男1 こう見えてスキューバの免許持ってます。

女3 おっ、すごい。じゃ私を海の底まで連れてって。

男1 よしきた、君を人魚にしてあげよう、リトルマーメイド、じゃ、列車から飛び降りて。

女3 飛び降りる？

男1 行くよ、えい。

女3 わっ、待って、えい。あっ、これって無賃乗車なんじゃない？

男1 構わないさ、今度この鉄道ごと買い取ってやる。

女3 おっ、急に大富豪設定！

男1 イメージは大胆に！

女3 わっ、海岸線、すごい。走るわよ。

男1 ちよ、おーい、待ってくれー。

女3 白い砂浜、ゆるやかに曲がっている海岸線、波、波音、ザブーン、さらさらさらさらさら、あっ、スタイルの良い水着の女たち、男たち、わっ、外国人ばっか、そっか、イギリス海岸ね、ここ。

男1 イギリス海岸、公園も鉄道もイギリスが発明だったっけ。

女3 そう。産業革命！ あっ、コーヒートか飲む習慣も、ここから始まった。

男1 （飲む）んー、美味しい！

女3 よし、泳ごう。

男1 いや、脱いじゃ駄目だよ、水着着てないし。

女3 誰も見てないわよ、全裸で行こう。

男1 全裸はマズいって、僕の方が、本当、それは色々。

女3 えー、んー、残念だけど、了解しました。

男1 着て着て。いや、むしろウエットスーツをイメージ。

女3 あっ、そっか、海の底へ行くのね？

男1 僕の指示に従って、油断するとヤバいからね。

女3 でも実は私内緒にしてたけど。

男1 なに？

女3 人魚だったの。

男1 突然の告白、人魚！

女3 私がああ岩場で歌を歌うと、船が難破するって伝説になった。

男1 えっ、怖い感じのあれですか？ ローレライだっけ。

女3 セイレーンよ。でも、今では心を入れ替えて船を安全に航行させるため、お守りを売って金儲けしてまーす。

男1 わっ、ビミョー。

女3 とにかく、飛び込むわよ、せーの。

男1 ザブーン。

(女3、突然、立ち止まる。長い沈黙。)

例えば、暗転しても良いかも？ ここまでの寸劇で楽し気な音楽が流れているなら、一回暗転し、音楽がカットアウトし、明転。雰囲気が一変していて、男1が戸惑い始めている、みたいなの。)

女3 . . .

男1 . . . あれ？ どうしたの？ (すっかりノリノリなので) 海の底だよ、人魚さん人魚さん、綺麗な魚が、ほら、たくさん . . . ん？

(静寂。雨音だけが。)

女3 . . . 飛び込むと、思ったんでしょ？

男1 えっと、何の . . . ?

女3 さっき、雨の中、橋の上で、声を掛けたのは、私が飛び込むんじゃないかって、心配して . . .

男1 . . . ああ、いや、えー、えっとですね . . . あそこ、今まで何回か、そういうことがあって、危ない橋なんですよね、この辺に住んでいる人はみんな知ってて、いや、事故か自殺か分からないけど、3か月くらい前にもそういうこと . . . なんか、気になっちゃってさ。

女3 . . . ね、だよ、私暗かったもんね。

男1 ああ、いや、確かに思いつめていたのかなって、すみません、勝手に。

女3 いいのよ。当たり前だし。

男1 . . . っことは . . .

女3 そんな、ハッキリと自殺しようなんて思ってなんか、ただ、なんか、もうどうでも良くなってしまったゲージが、私の中で、こう(手で表現しつつ)、最大限で。

男1 なんか、あったんですよね、やっぱり、

女3 ええ、なんか、あったの、うん。

男1 聞かない方が、いいですか？

女3 ー、まあ、ここまで話しちゃったし。

男1 何が、その、あつて・・・

女3 ・・なんか、海の底だと、話しづらいから、陸に上がりましょうか。

男1 えっ？ あつ、ああ、はい。

(電気を点けて、部屋の雰囲気、普通に戻る。)

女3 コーヒー、いただきます。

男1 はい。あつ、僕も。

女3 私、これならブラック、飲めます。

男1 すみません、なんか、砂糖とミルク入れるタイミング外しちゃいましたね。

女3 ピクニックの最中でしたし。

男1 ええ。

女3 私ね、この間、体にガンが見つかったの。

男1 えっ？

女3 なんかね、ちょっと病状進んじゃってて、微妙なんだよね、治るか治らないか。

いや、医者ね、先生は、大丈夫、手術で治せます、なんて言うんだけど、なんか信じられないって言うか。だってさ、なんか次々と親戚とか、もう十年近く会ってなかった従妹までお見舞いに来てさ、それってさ、かなりヤバいってことだ。なって、なんか、すごい追い詰められちゃって。それでね、逃げてきちゃったのね、病院から、衝動的よ、勢いで、手術を前に、病院を抜け出して。

男1 じゃ、あの、今。

女3 そうしたら、なんか私、ピクニック行きたいなって。

男1 ピクニック。

女3 なんか、子供の頃行ったきりで、ずっと何処にも行ってないなって。

男1 ああ、まあ確かに、ピクニック行こう、なんて、大人になるとなくなっちゃうかも。

女3 なんかね、元気なのよ、私、普通って言うか、まだどこも痛くもないし、これから痛くなるかもって、でも今はぜんぜん平気だし。でも、このへんに(下っ腹のあたり)にあるらしくって、なんか、なんか勿体ないでしょ、明日手術とか。なんか、なんか、手術なんてしてさ、抗がん剤で、辛い治療続けてさ、髪の毛やっぱ抜けるらしいし、治療自体が苦しくって、それで病人みたいになってさ、それで、それで、助かるんならまだしも、やっぱ無理でしたって、なんかさ、そんなことになるくらいなら、今、今のうちに、とか、意味分かんないだろうけど、私的には、ベッドの上とかじゃなく、なんか、元気なうちに、なんて、理解できないと思うけど。

男1 いや、理解、・・・出来るなんて、軽々しくは、あれだけど、あの、分かる気が、その気持ち。そんな、命の問題とかじゃないけど、昔陸上やってて、あつ、僕の話で、けっこう走るの速くてね、県大会とか、あと少しで。それで、でも練習しすぎちゃってさ、膝やっちゃって。一回ダメになって、でも再起をかけて、何度も手術して、それで、ダメだったって。頑張ったのに、ダメで、そういうことあって。ごめんさい、うまく言えないけど、気持ちは、分かる気が、気力が、もうさ、あの時はぜんぜんなくなっちゃって、いや、違うとは思うんだけど。

女3 ううん、きつと違わない、私の気持ち、そんな感じかも。

男1 すみません。

女3 なんて謝るの。

男1 なんか、いや、だって、普通はダメでしょ、こういうの、病院に戻って手術を、って、そういう方向にあれしなきゃいけないでしょ、僕、それが、逃げ出したこと肯定しちゃマズイって言うか。

女3 ああ、ね、そっか、それで、あなたいい感じなのね、私にとって。その通り、普通の人は、みんな、私の周り全員、私の気持ちなんて本当は分かかってなくて、手術頑張って、大丈夫大丈夫って。そんなんじゃないのにね、私は、もっと、すごい落ちてて、ひねくれてるしさ、慰めてなんか、これっぽちもされたくなくって、そういう場所から、ある意味、一方的に愛を押し付けられる場所から、逃げ出したくなって、今があるの。

男1 いや、あのう、本当、矛盾するけど、言いづらいけど、治療とか、そりゃした方がって、あの、僕だって、すみません。

女3 あなたも愛を押し付ける？ 今日会ったばかりの、あなたも。

男1 いや、そう言われると、何も言えなくなっちゃうって言うか。

女3 足、速いの？

男1 えっ？

女3 さっきの話。

男1 いや、昔の話で、普通には歩けるけど、走ったりは、あんまり。

女3 そう、残念ね、頑張ったのにね。

男1 えー、今他人の心配してる場合ですか？

女3 ははは、そっか、そうだね。ねえ、やっぱ一緒に寝ましょ、いや、襲わないから、襲わないし、襲わせませんから、ただ、もうちよっとお話、いいでしょ？
どちらかが寝落ちするまで。なんか、今ね私、楽しい、久々よ、あなたいい人よね、そうよ、命の恩人だもんね、私を救った責任もあるし、お話付き合ってください。

男1 はい、是非。

女3 おっ、是非って言ったな。

男1 えー、言うでしょ、そりゃ。

女3 社交辞令。

男1 違いますって、僕だって、ほら、ここまで話していると分かるでしょ、友達いな
タイプで、
女3 そう？ モテそう。
男1 いやいや。
女3 えー、けっこう格好いいのにな。
男1 おっ、初めて言われました。
女3 いや、今コンタクトし忘れてて、ぼやーつとですけど。
男1 なーんだ。
女3 ははは、でも、きっと格好いい気がします。誰か他人とこんなにお話したの久
しぶり。一緒にいて、楽って言うか。
男1 まいっか、それで。
女3 コーヒー、いただきまーす。
男1 あっ、マジ寝ない気ですね、じゃ僕も。

(二人で同時に、コーヒーを飲む。なんだか笑顔。溶暗。)

■ 5. 晴耕雨読

(明転。時間が経っている。雨は相変わらずだけど、外はもう明るい。)

女1 へー。
女2 何よ、へーって。
女1 へーはへーよ。
女2 読んだの？
女1 うん。
女2 それで？
女1 だから、へーって。
女2 何それ、そんな感想ある？
女1 あなた勇氣あるわね？
女2 えっ、ダメだった？
女1 そうじゃなくって、あなた自分が書いたヤツの、すぐ感想聞けるタイプのなの
ね？
女2 えー、聞かなきゃ分かんないじゃない。
女1 そうだけど、私だったら聞けないかなって。
女2 で、それで？
女1 んー、私は、好きよ、こういう、何て言うの、何も起きないタイプのやつ。
女2 えー、何も起きないって何よ。
女1 だって、結局、起きないでしょ、エッチしないし、ここでは何も。物語は自分
たちの外側にあって、でも今は、そこから離れていて、ここは何だか現実ではな
いどこかで、そんな雰囲気の場合にいて、物語は、なんか会話の中に影絵みたい
に、見えたり見えなかったり。

女2 えっ、それって読解？ 解説？ 私は読後感を聞きたいんだけど。
 女1 これが読後感でしょ、面白かったって、思ってますよ、本当。
 女2 なら、はい、ありがと。なんかさ、現実世界に色々あると、物語の中では何も起きない世界を描きたくなるんだよね。
 女1 現実世界に色々ね、それで、この後二人はどうなったの？
 女2 どうって？
 女1 その夜、ずっとお話して。
 女2 いつの間にか寝落ちして、それでお終い。
 女1 いや、実話を元にしてことは、本当はこの先があるんでしょ？
 女2 あー、んー、でもそれは言わない約束。
 女1 えー。
 女2 想像力にお任せ、ってことで。
 女1 ー、分かった、作家先生がそう言うんなら、はい。

女2 それじゃ、次の話行きましょうか。
 女1 次？
 女2 ページめくって。短編集だから次があるでしょ。
 女1 えっと、『本と』・・・、『斧(おの)』？
 女2 『本と斧』
 女1 なんか、変なタイトルね。・・・(読み始める)

(女1、読み始める。どこかで猫の鳴き声。猫鈴も。タイトル『本と斧』。)

■ 6. 本と斧

(夕方の街、路上、女4、立ち止まり、歩いてきた方向を気にして、待つ。遅れて、男2が登場。本を読みながら歩いている。)

女4 あの、すみません、少々お尋ねしますが。
 男2 はい？ えっ、僕ですか？
 女4 はい。
 男2 ちょっと待ってください。(本を鞆にしまって) えっと、何ですか？
 女4 ・・・、あのー、ストーリーさんでは、ないですよ？
 男2 ーん？ ストーリー、さん？ 僕が？
 女4 いえ、断定しているわけではなく、もしかして、とか、そんな感じなんですけど。
 男2 いや、あの、違います。
 女4 本当には？
 男2 本当です。
 女4 信じていいですか？

男2 えっ、疑ってる感じですか？

女4 いえ、すみません、万が一、万が一って、確認、そう確認です。

男2 確認。

女4 ええ。

男2 ストーカーでは、ありません。

女4 きっぱり？

男2 きっぱり。

女4 絶対？

男2 絶対。

女4 信じていいん・・

男2 やっぱ疑ってますよね、明らかに！

女4 いや、あの、・・・駅からのこの道、ここまで、ずーっと一緒でしたよね？

男2 いや、そうなんですか？ 僕本を読んで歩いてたんで。

女4 金次郎！

男2 二宮の？

女4 ええ。

男2 違います。

女4 きっぱり？

男2 そのきっぱりって何ですか！

女4 いや、そんな感じかなって。

男2 あのですね、電車降りる時に話が中途半端で、ちょうどいいところまで読んでしまおうと、そうじゃないと気持ち悪いって言うか、あるでしょ、そういうことって。

女4 今も？

男2 えっ？ まあ。

女4 じゃ、読みます？

男2 今ですか？

女4 ええ。

男2 いや、いいですけど。

女4 すみません。話しかけてしまっただけ。

男2 いえ、別にいいですけど。

女4 どうぞどうぞ、続きを、ごめんなさい。

男2 ああ、そうですか、なら・・・、(本を出しながら)

女4 ストーカーさんでは、ないんですものね・・・

男2 まだ疑いは晴れてないんですね！

女4 いえ、本当、すみません。あのですね、駅から3丁目方面、商店街までは10

人以上いたけど、一人減り、二人減り、とうとう私とあなただけが。タバコ屋の角を曲がって、あの、古いまあるい郵便ポストの横の、細道に入って、ほら、知

る人ぞ知る抜け道でしょ、あそこ、あんな道まであなた、私の後についてきて。

男2 ついて行ってませんよ。

女4 でも実際。

男2 んー、そりゃ、帰る方向が一緒、だったんですよ？

女4 それはそうだと、ね、私も思ったんですけど、けど、だんだん、不安に、いえ、正直に言いますが、恐怖が沸き起こってきて。

男2 恐怖。

女4 こわって。

男2 この特徴のない無害な感じの男に対してですか？

女4 まあ、ええ。それで、いつその事、聞いてしまおうと。

男2 ストーカーさんかどうか。

女4 はい。

男2 なぜさんづけ？ いや、えっと、もう一回言いますが、僕はストーカーではありません。

女4 分かりました。はい。了解です。もう本当、大丈夫です。すみませんでした、疑ってしまって。

男2 いや、疑いが晴れたのなら、まあいいですけど。

女4 ええ、まあ、正直微妙ですが、声をかける前よりは、多少。

男2 多少・・・

女4 だって、本人がまさか、自分で自分のこと、ストーカーだって宣言するわけもないと思っ

男2 ああ。いや、でも僕は本当に。

女4 はい、それはもう、はい。ただ、せめて第三者が証明とかしてくれたいんですが。

男2 第三者、ですか、んー。

女4 お友達とか。

男2 ああ、すみません、いなくって。

女4 友達が？

男2 はい。

女4 ああ、そんな感じの、あれで。

男2 いやいや、変な目で見ないで下さい。

女4 ご家族は、ご兄弟とか。

男2 兄弟はいません。両親も二人共早くに他界して。

女4 えっ、じゃ、証明難しいじゃないですか。

男2 んー、ですかね？

女4 ええ。さっきまで、疑いが限りなく晴れそうなどころまで行きましたけど、ちよっと盛り返しましたね。

男2 盛り返す？ 疑いが？

女4 残念ながら。

男2 盛り返すとか、あの、言い方が。いや、お聞きしますけど、もしも僕がストーカーだとしたら、どうするつもりで？

女4 ストーカーさん！

男2 いや、違うんですけど、もしも、ね、もしもです、もしも、ストーカーだったとしたら、一体どうするつもりだったのかな、って。警察にでも突き出しますか。

女4 警察？

男2 ええ。

女4 あんな奴らに任せられません。

男2 そうなんですか？ なら。

女4 いえ、私自分の力で解決しよう。

男2 自分の力？

女4 エイって。

男2 エイ？

女4 ええ、ほら、さっきから手にはもう「斧」が。

男2 わっ、危ない。斧？ 斧！ えっ、エイって？

女4 こうやって、エイ。（振り回す。何回も？）

男2 わっ、いや、あの、やらないで。えー、警察に任せた方がいいんじゃないですか？

女4 刑務所に入りたいんですか？

男2 そうじゃないですけど、いや、入りませんよ、違うんですから、ストーカーじ

やないんですから。

女4 もう何度もその言い訳は。

男2 いや、言い訳じゃなく、本当に。

女4 分かりました。

男2 分かっちゃいませんよね？ ちょっとその斧、しまってください。

女4 いえ、まだそういうわけには。

男2 バリバリ疑ってますよね？

女4 そんなこと、あくまで、えっと、これは保険です。安全のため、最低限自分を
守る態勢は取っておかないと。

男2 ー、とにかく、切りつけないで下さいね。

女4 もちろん、まだその段階ではありませんから。

男2 その段階って、いや、あの、あっ、僕が先を歩きます。

女4 えっ？

男2 あなたが先に歩いて、僕が後から歩くから、疑わしいんですよね？ だったら、
僕が先に歩いて、あなたが後ろからついて来ればいい。

女4 私にストーカーさんになれど？

男2 いやいや、そうじゃなく、とにかく僕が先に歩きますから、ね、それなら安心
でしょ。

女4 まあ、そうですね、それなら、はい。

男2 後ろから切りつけたりしませんよね？

女4 なぜ？

男2 いや、しないならいいんです。ちょっと気になったものですから。斧ってなん
ですか！ 斧って！

女4 今更？

男2 いやそうですけど！

女4 しません。するわけがないでしょ。

男2 ええ、そう信じてますよ、だって僕はストーカーではないんですから。

女4 なら大丈夫です。
 男2 じゃ、行きます。さようなら。
 女4 はい。さようなら。方向一緒ですけど。

(二人、退場。)

■ 7. 晴耕雨読

(まるで、その光景を路上で見ていたかのように女1と女2が登場。)

女1 (二人が去った方を見ながら。) 最近、この辺り多いものね。

女2 ストーカー？

女1 ストーカーに追われているんじゃないかって疑心暗鬼の女。

女2 そっち？

女1 多くない？ 一緒に歩いている通行人に警戒心バンバンの人。

女2 ー、でもそれって、やっぱストーカーとか怪しい人増えてるからなんじゃないの？

女1 そうかな、人を信じられない人っていうのが増えた気がするの。

女2 まあ、ネットとか見ると、他人つてものが恐ろしくなってくるものね。

女1 でしょ。あつ、ネットか、ネットのせいか。

女2 私、もう無駄にスマホは見ないようにしたわ。

女1 それで電源切ってるの？

女2 まあ、そうかな。

女1 あんなにゲームやってた人がね。

女2 一度冷めると、ゲームに課金とか本当無駄だし。

女1 でも今の世の中、それしかストレス発散させる方法がない人もたくさん。

女2 あー、ー、でもやっぱ無駄かな、自戒の念も込めて言うよ。

女1 デジタルデトックスって言うんだっけ？

女2 あつ、パソコンとかスマホとか一切見ないようにするってやつね。それ今の私じゃん。それで普通の人間的なコミュニケーションを取り戻すとか。

女1 むしろ友達なくしてるんでしょ？

女2 あそつか。でも一切は難しいけど、必要かもって思うのよ、ネットとか、もう本当もういいいかなって。

女1 潔いよね。

女2 洪々よ、便利なもの使わないって言うんだから。

女1 ああはなりたくないからね。

女2 えっ？

女1 斧を持った女の人。実際いたんでしょ、ああいう人が。

女2 ああ、たまたまね、目撃してしまっつ。

女1 怖っ。

女2 ほら、またやってきたわよ。

(二人、やってきた男2と女4と入れ替わるように退場。)

■ 8. 本と斧

(再び、男2、女4が登場し。)

男2 あの。

女4 はい？

男2 いいですか？

女4 ええ。

男2 どこまで、ついて来るんですか？

女4 えっ？

男2 いや、確かに言いましたよ、僕の後について来ればって。でも、さすがに長くありませんか？

女4 長い？

男2 時間が、いや、距離って言うか、ずっと一緒に。

女4 帰る家が、同じ方向なんですね。

男2 本当ですか？

女4 えっ？

男2 本当に、ただ帰る方向が同じなだけですか？

女4 何か、疑わしい点でも？

男2 いや、あの、さっきの斧はどうしました？

女4 それはここに。

男2 ほら、やっぱりまだ手に持ってる。

女4 そりゃ、持つんなら手でしょ、まさか足では持てませんよ。

男2 そういうこと言ってるんじゃない。そんなもの手に持って、いつ後ろから切りつけられないかと、もうずっと冷や冷やしっぱなしで。

女4 えっ？ 私に切りつけられるようなことしたんですか？

男2 してません。してないけど。

女4 なら安心じゃないですか。えっ、まさか何か良からぬことでも考えて。

男2 考えてません。

女4 だったら安心じゃないですか。でしょ。

男2 僕の方の問題じゃないんですけどね、僕は、安心ですよ、ただあなたが、安心じゃないって言うか。

女4 私が？ なんで？

男2 いや、だって手に斧が。

女4 斧斧ってうるさいわね、言いましたよね、護身用ですって。あなただって手に本を持っているでしょ？

男2 そりゃ、読みながら歩いてましたからね。

女4 それと一緒にです。

男2 一緒じゃありませんよ、本と斧ですよ。「本と斧」ですよ。

(しばしの沈黙。)

女4 不思議ですね。

男2 何が？

女4 前を歩く人が、疑う人になるんですね。

男2 ああ、そうですね。

女4 不思議。

男2 そういふ構造なんでしょうね、きつと。

女4 構造？

男2 人間はね、いや生き物全般ですけど、一度決まった構造からは逃げられないんですよ。

女4 よく分かりませんが。

男2 そうですよ。すみません。

女4 いっそのこと、並んで歩きます？

男2 なんて？

女4 なんとなく。

男2 本と斧が？

女4 ふふ、ははは。・・・あの、それ、何の本ですか？

男2 えっ？

女4 本です、その本。

男2 いいでしょ、なんだから。

女4 いいですけど、何かなあって思ってます。

男2 別に大した本じゃありません。

女4 大した本じゃないのに、歩きながら？ 落ち着いて椅子に座ってとかじゃなく、歩きながら？

男2 それこそ勝手ですよ、本の読み方くらい。

女4 護身用？

男2 なんで護身用になるんですか、本ですよ。

女4 それで殴れば痛い。

男2 そりゃそうですね。でも護身用ではありません。読んでるんです。今まさに、この本をね。さっき言ったでしょ、いいところまで読んでしまおうと。

女4 いいところって？

男2 だから、ちようど話の切れ目の、んー、いいところはいいところです。

女4 やっぱりよく分かりません。

男2 最初から全部、本の内容話さなきゃ分かりませんか？

女4 ・・・。あら、すみません、ありがとうございます。

男2 いや話しませんよ、話すなんて言っていないですよ。

女4 今最初から全部って。

男2 いや、話さないと分かってもらえないのになって。

- 女4 はい。話してくれないと私。
男2 えー。マジ？ いやマジ？ えー。
女4 すみません、お手間を取らせて。
男2 普通、ストーリーカーにそんなこと頼みます？
女4 ストーカーさん？
男2 いや違います。違いますけど、疑っていた相手に、えー、本当に？
女4 あっ、その本、お借りしましょうか？ 自分で読みますか？
男2 読みかけなんです。今ね、いいところなんです、歩きながら読むほどに、ね？
女4 貸せないっていうんですか？ あっ、じゃ私が買い取ります。ね、定価でいいですから。
男2 僕の話聞いてました？ 売るわけないでしょ、そうでしょ？
女4 でも、そこまで面白いなんて言われて、それで何もなしですか？
男2 いや、あの、面白いとは言ってます、ただ、中途半端だと、今ちょうど、んー、そう申し上げておるのですよ、ああもう言葉が変だ。
女4 面白くないんですか？
男2 いや、そうも言ってますけど、とにかく、お貸しできませんし、売ることも出来ません。せめて、せめて、読み終わってから、ね、それなら、構いませんが。
女4 なら、仕方ありませんね、選択肢は一つしかありませんね。
男2 選択肢が一つ？
女4 どんな内容なのか、少しでも。
男2 話せと？
女4 はい。
男2 えー、本当に？（腕時計見る）
女4 あっ、今時計見ましたね。
男2 そりゃ。
女4 つまりやる気になったと。
男2 なんでそうなるんですか。
女4 時間、なかったんですか？
男2 いや、ありましたけど。
女4 やったー。
男2 えー、んー、・・・分かりました、いいでしょう、ちようどそこにあるベンチ
女4 ああ、座りましょう座りましょう。駅からずっと歩いて、けっこう疲れましたものね。
男2 あとちょっとで家に着くんですけれどね。
女4 でもまさかお邪魔する訳にも行かないでしょ、ストーリーカーさんの部屋に。
男2 だから！
女4 分かっています、はい、違うんでしょ、それはもう、本当。
男2 サイトウです。
女4 サイトウ？ ストーカーさんの名前？
男2 ストーカーさんじゃなくて、サイトウさんだって話です。
女4 なんか普通ですね。

男2 普通ですよ、そりゃ、もう本当、これでもかかってくらい普通なんです。
 女4 サイトウさん、インプリント、普通の、サイトウさん、はい。私はよし子です。
 男2 よし子？ 名前ですか？ 本当の名前？
 女4 カッコ飯で。
 男2 分かりました、それでOK。じゃ、行きますよ。ほら、雨降ってきそう。
 女4 本当ですか？
 男2 なんとなく雨のにおいが。
 女4 そうですか？
 男2 ええ、えつとですね、この物語は、そもそも、男が、僕みたいな、何の変哲もない男が、仕事帰りに駅からの道を歩いてるところから・・・

(溶暗。)

■ 9. 晴耕雨読

(「本と斧」読み終わって、しばらく経っている。

女1が一人いるところに、女2が出てきて。)

女2 いたー、雨の日って、時々膝が痛くなるんだよね。

女1 昔の傷？

女2 うーん、一生付き合うんだろうね、こういう昔の怪我とか。

女1 大丈夫？

女2 うん、今湿布貼って来たから、そのうちに。

女1 (カーテン開けて) ぜんぜん雨上がんないね。ここからの景色好きんだけどな。前の町が一望出来る。海も見えるしね。

女2 午後には上がるみたいよ。瞬間、すこしは見られるんじゃないかな。

女1 そうなら嬉しいけど。(カーテン閉めて)

女2 あっ、いつの間にカリカリなくなってる。

女1 本当？ 花火出てきたの？

女2 見てないけど。気が付かないうちに食べて、隠れたみたい。

女1 そっか。あの、フカフカしたやつ、撫で練り回したんだけどな。

女2 そうね、気持ちは分かるけど、それに危機を感じて出てこないのかも知れないけど。

女1 えー。

女2 さて、じゃ次行きましょか。

女1 次？

女2 これ。

女1 わ、何？ 原稿用紙？

女2 そ、書きかけのやつ。

女1 そんなもの、一体。

女2 発掘されたの。

女1 それも？

女2 うん。見つかって良かった、途中だったから、ずっと気になっていて。

女1 書きかけのまま行方不明に？

女2 そう。

女1 また実話が元になってる。

女2 ああ、うん。って言うか、私のじゃなく、他人（ひと）から聞いた話で・・・

女1 あっ、まさか。

女2 あっ、分かつちゃった？

女1 その顔。

女2 いや顔は普通にしてたでしょ。

女1 表情の微妙な変化に気が付くタイプ。

女2 そうかな、そうよ、あなたから聞いた話。

女1 じゃ、あの話か。

女2 でもね、ちゃんと、フィクションに落とし込んでる、さっきのみたいに、想像

力駆使して、実話とはぜんぜん変わっちゃってるかも。

女1 いいわよ、別に、もう過去の話だし。

女2 うん。（原稿用紙を女1の前に）はい。話聞いた後、まだ頭にある内につて、

急いで殴り書きしてて。

女1 殴り書きって言うだけあるわね。

女2 えっ、字汚い？ 読めない？

女1 発掘された、象形文字みたい。

女2 マジ？

女1 ははは、いや、かろうじて判読できそう。

女2 良かった。まだ途中だけど、今日は読んでほしくって。

女1 いいの？ 本になる前に。

女2 あなたなら。

女1 そ、なら、せっかくなので読ませてもらおっかな。

女2 コーヒー入れなおしてくる？

女1 ビール。

女2 ビール？

女1 なんかさ、なんか、仕事サボって昼間っからビールって、ちょっとあれじゃな

女2 い。

女2 あれ？

女1 最高じゃない！

女2 わ、最高？ そっち？ ダメ人間とか言うのかと思ったら。

女1 いやいや、最高よ、でしょ？

女2 うーん、まあ、はい（笑）。

女1 ね、同意してくれると思った。

女2 ねえ朝ごはんは？

女1 私はいらない。あなたはちゃんと食べてね。

女2 うん。分かった。ちょっと待ってて。

(女2、ビールを準備しに行く。音楽が聞こえている。ビールのためだけの、誰も何もしない、しばしの沈黙の時間。……。女2、コップに注がれたビールを二つ持ってきて、一つを女1の前に置く。)

女2 はい。

女1 ありがとう。

女2 かんばしい。

女1 なんに？

女2 わかんないけど。

女1 じゃ、わかんないものに、かんばしい。

女2 (飲んで) わーっ、冷えてるね。

女1 うん。

女2 ねえ、怒らないでね。

女1 なにが？

女2 うまく書けてないかも知れないし。

女1 そういっなのは別にいいわよ。あれ？ タイトルは？

女2 まだだったか。じゃあなたが決めていいよ。(立ち上がり、カリカリの袋を持ってきて)

女1 ー、『かぐや姫』しかないかな、やっぱり。

女2 『竹取物語』じゃなく？

女1 竹取ってないし。

女2 そっか、そうだね。『かぐや姫』……(空になった猫皿にカリカリをザララって入れながら)

(女1、原稿をタンタンって揃えて、それから読み始める。どこかで猫の鳴き声。猫鈴も。タイトル『かぐや姫』。)

◆執筆メモ2

ゆったりした会話が続いて、なんか、何も起きないなあって物語を書こうとしてみました。本当、コーヒーブレイク的な。雨の日の、少し時間が制止したみたいな、そんな時間と空間がイメージの基本に。なるべく我慢して、最後の最後まで、何も起きない感じをキープ。「物語」から「現実」に帰る最後の場面までは、そんな感じで、最後にひっくり返ったら良いかな、と。よく私が言う言い方としては、積み上げて行って、積み上げて行って、最後にそれをドーンって押して崩すと。

その上で、『晴耕雨読』は、清水邦夫の『楽屋』をイメージしてアイデアが出てきました。『雨のピクニック』は、書きながら、ですが、岸田國士の『紙風船』を参考にするような感じのものになりました。茶番劇的な、ふざけた寸劇をやる中で、シリアスな場所に着地する展開とか構造が一緒ですね。ここまで一気に書いて、そ

の後、別に書いていた『本と斧』をくっつけました。『本と斧』だけで長編書けそうだと思いつつ、なのですが、まあ、明るいこういうエピソード欲しかったし、良い判断だと思つて。ここまで、何も起きないような二人芝居が三本。

・・・その他、菅田将暉、有名女優、結婚の話とか。膝をやっちゃった話。宮沢賢治の名前が出てきた意味。東日本大震災。大きな余震。実はそれ方言だよ。

■ 10. かぐや姫

(お洒落な感じの居酒屋。男3と女5。晴耕雨読の二人も、そのままその店の席についているかのようになっても良いかも。また、あるいは、最初にビール持ってくる店の店員を、流れで女2がやってもいいかも。)

店員 お待たせしました。

男3 はい、かんぱーい。

女5 なんに？

男3 なんだろ、とにかくかんぱーい。

女5 かんぱーい。

男3 わっ、おいしいね。

女5 うん。

男3 ・・・ああ、あの、さっそくで悪いけど、あの、これ。

女5 えっ、なに、この四角いもの。

男3 開けてみて。

女5 えっと、びっくり箱とかじゃないわよね？

男3 違います。

女5 鳩が出てくる？

男3 サイズ的に無理でしょ。

女5 マメハチドリ。

男3 何それ。

女5 キューバに生息する世界最小の鳥。

男3 入ってません。

女5 ー、開けたら、なんか取り返しがつかない気が。

男3 これが僕の気持ちだから。

女5 その気持ち、一体幾らしたの？

男3 給料の3・・・

女5 給料を基準にしないで！

男3 えっ？

女5 給料を基準にするの、重い。

男3 あっ、ああ。

女5 国家予算の何分の一とか。

男3 いや、そりゃ何万分の一とかでしょうけど。

女5 あのさ、私、バツイチなんだよ。

男3 だからどうしたの？

女5 あなたには、私なんかよりもっと相応しい相手が。

男3 そんな在り来りな言い方。

女5 在り来りでも本当のことだから。

男3 よくよく考えての結論なんだ。決して勢いとかじゃない。だいたい勢いである
な入ったこともない小洒落た宝石店なんて入れないよ。

女5 覆面して？

男3 強盗じゃないから。

女5 あー、もう、早すぎるって。

男3 別に早くなんか。君ちゃんも喜んでくれると思ってただけど。

女5 そりゃ、まあ嬉しいけど、あー、でも。

男3 どうか受け入れて欲しい。

女5 えー、本当に？ まさかそんなことって。

男3 何をそんな、別にどこも不思議はないでしょ。

女5 不思議・・・？ は、あるのよね、私的には。私、別に美人とかじゃないし、
だから一方的に人から好かれるはずはないって思うのよね。思ってきたの。性格
だって、別に良くないし、可もなし不可もなしでしょ、ぶっちゃけ。家にお金が
あるわけじゃないから、財産狙ってってパターンも考えられないし、なんだろう、
どうして私の人生ってこうなんだろうって。

男3 ン？ ってことは、ずっと男からモテモテだと？

女5 なんかね、告られるの、昔っから、いい年になってからは、それこそプロポー
ズとか、何度も。

男3 へー。そりゃ不思議だね、って僕が言うのも変だけど。

女5 私の魅力っていったい何？

男3 ンー、ンー、ンー。

女5 考えすぎ！

男3 いや、そのツッコミ。

女5 ツッコミ？ のうまさ？ あっ、それでポケどもが集まると。

男3 いやいや、何て言うんだろ、付き合いやすさ、みたいな感じかな。

女5 何それ。それって魅力のカテゴリーに入るの？

男3 入る入る、むしろ最強だよ。

女5 ンー、正直、そう言われてもぜんぜん納得できない。

男3 そこまで？ そこまでモテてきたの？

女5 まあ、はい。

男3 言うね。

女5 あくまで「なぜか」ってワードが頭に付いた上でよ。

男3 どれくらい？

女5 んー、昔は、お金持ちの身分の高い人びとが次々と、5人も求婚してきて。

男3 身分の高い？

女5 うん、よく分かんなかったけど、まだ中学生だったし。

男3 中学時代？

女5 なんかね、おじいさんに言われるままに、無理難題を言って、それが出来なければお断りって言って、なんとか難を逃れたけど。

男3 無理難題って？

女5 竜の首に飾ってある5色の宝石、とか。

男3 あれ？ 聞いたことあるぞ。

女5 それに、中国にある火ねずみの皮衣とか。

男3 それってもしかしてかぐや姫じゃない？

女5 あっ、知ってた？

男3 なーんだ、びっくりした。

女5 いやいや、原因不明で告られて、それを断る人生を歩んできたのは本当よ、それでかぐや姫とおんなじだなって、読んだ時思っ、ほら、両親知らなくて、おじいさんとおばあさんに育てられたとか。

男3 それって本当なの？

女5 うん、とうとう口を割らずに天国行っちゃったからさ、二人共。自分の親が誰か、本当知らないのよ私。戸籍上はおじいさんとおばあさんの子供ってことになってるけど、歳がさ、さすがに離れすぎてるから、やっぱ別の親がいると思うんだよね、そりゃ。

男3 それで、かぐや姫か。

女5 それは半分冗談だけど、でも、かぐや姫がいくら美人って言ったって、なんでモテるのかやっぱよく分かんないでしょ、あの話。確か噂だけで男どもが集まったのよ、竹切ってるじじいの所に、身分の高い連中が。

男3 あー。

女5 あなたの、私への気持ちとかもさ、なんか、そういう不思議とやっぱ同じって気が。

男3 いやいやいや、違うって、僕のは、何て言うか。

女5 ボケがツツコミを探して？

男3 だからー(笑) いやだから違うって、笑わせないで、あのですね、・・・子供の頃さ、近所に、すごい素敵なお姉さんがいてさ、それが、君ちゃんで、急に引越していなくなったじゃない、ある日突然、何の前触れもなく。*この台詞の冒頭の「だからー」は方言です。強い同意を表している。ここでは、乗りツツコミ的な感じで同意してみている感じ。

女5 おじいさんの仕事の関係で、引越し多かったからね、私ん家。

男3 それで、ずっと心に残っていて、そしたらさ、会社の転勤先に、君ちゃんがいるて。

女5 よく覚えていたわね、子供の頃よ、見た目だってぜんぜん変わっているのに。

男3 君ちゃんは変わってなかった。

女5 成長してないってこと？

男3 いやいや、でも、本当、僕的には昔のまんまで。

女5 絶対そんなわけないと思うんだけど。だって結婚もして、旦那さん亡くなって、けっこう苦労もしたし、なんかポロポロでさ。

男3 いやー、そんな話聞くまでは、そんなこと思ってもよらないって言うか、あっ、笑顔、いつも笑っててさ。

女5 まあ、そりや笑ってかないとき、何があっても、余計辛くなっちゃうしって。

男3 そういふポジティブなところがさ、素敵って言うか、賢いなって。それで勇気を出して、子供の頃から温めていた気持ちを君ちゃんに。

女5 あの時はおめん、大笑いして。

男3 いや、笑われると思ってたし、そりやって感じで、笑いすぎだけど。でもご飯とかには付き合ってくれて。

女5 ご飯くらい、そりやでしょ。

男3 でも僕としては、どんどん距離が縮まった気がして。

女5 はいはい、もうその話は。

男3 いや、ここからが一番重要な。

女5 いや、もう本当、だって断れなくなる。

男3 なんて、断る結論ありきよ。考えてよ、一回真面目に。

女5 いや、あの・・・私、実は、警察に狙われているのよね。

男3 警察に、狙われている？

女5 うん。

男3 警察に、狙われている？

女5 二回言ったね。

男3 それくらい驚きだよ。

女5 うん、さっきも話したけど、私前に結婚してたことがあったでしょ、すぐ旦那さん、亡くなっちゃって、未亡人になっちゃったけど。

男3 ああ、まあ、聞いたけど。

女5 そのこと、調べたりした？

男3 なんて調べるの。

女5 普通調べるでしょ。

男3 普通調べないでしょ。

女5 プロポーズする時とか、一応相手の素性とか調べたりするものよ。

男3 ああ、そっか、そういう。

女5 私、その時にすごい疑われて。

男3 疑われて？

女5 警察とか、世間にも。

男3 ン？ えっ、まさか、いやいや、殺人とか？

女5 そのまさかよ、結婚してすぐだったし、私まだ若くて、相手ちよっと年上で、財産とか、まあ実際ちよっとは入ったし、保険金も少しは。しかも変にモテるでしょ、私。疑われる要素かなりあって。

男3 でもさ、それだけで。

女5 それだけで充分なのよ。ね、私も乗っていた車の事故なのにね、なんか、たまに隣の席じゃなくなって、後部座席だったから、とか、ただ疲れて寝てただけなのにね、旅行帰りだったから。電柱に激突して、運転席だけめちゃうちゃになつて。それも含め、疑おうと思えば疑える材料いっぱい、なんかさ、そりゃ怪しいって私だって思うわ。

男3 取り調べとか？

女5 まさか、そんな大っぴらには出来ないわよ、怪我人だし。ただ、私の入院した病室に何回も何時間も、何度も何度も同じ話させられて。

男3 うわー。

女5 疑ってるの見え見え、新聞の記事も、なんか悪意がある書き方してたし。

男3 本当？

女5 まあ、ゴシップ的には面白いネタだしね。で、そりゃね、やっど好きになって結婚した相手が亡くなって、すごい悲しんでるのに、悲しませてくれないって言うか、そういう余計なことがどんどん来て。ムカついて睨んでるみたいな顔、ニュースで流れてさ、今でもネットで検索すれば、あの時のやつ見つかると思うけど。

男3 なんか、最悪の状況だね。

女5 でね、私が次再婚とかさ、ちよつと警察が目光らせてるみたいなの。

男3 今も？

女5 たぶん。そういう女はさ、懲りずに又やったりするのよ。

男3 えー、で、でも、そんな過去の話はあれだけど、あの、僕と知り合ってたからの、ね、ずつと見えてきて、そんなことで結婚できないとか、あり得ないって言うか。

女5 そりゃ私もそうは思うけど。

男3 やつとこの間、君ちゃんの家の上がらせてもらって、その、朝まで一緒にいて、そしたら、思っちゃったわけですよ、こんな感じで、暮らしていけたら、みたいな。結婚したら、素敵だろうなって、ホント、思っちゃって。

女5 ありがと。私も、・・あ、いや、私の気持ちは、ほんと、置いといて、それ

以前の話題だから。

男3 それ以前の問題？

女5 つまり結婚って訳には・・

男3 乗り越えよう。

女5 そんな簡単な話じゃないのよ。

男3 一応聞いておくと、あの、好きは好きだと思ってるいいんだよね？

女5 ・・まあ、・・あーもう、はい。好きは好きよ、そりゃ。

男3 じゃ。

女5 どうせあなたのご両親が反対するわ、健在だったでしょ、お父さんもお母さんも。

男3 そうだけど、反対するようなら説得するし、なんだったら縁を切ったっていいし。

女5 駄目よ、そんなこと。

男3 いや、本当に。

女5 警察が疑うレベルのあれよ、無理なものは無理よ。

男3 でも。

男3 ……あの、ちょっと気になったから言いますけど、あの、向こうで近距離なのに双眼鏡の男、あれもしかして警察ですか？

女5 えっ？ あっ！ 紀一郎さん！

(男4が登場、双眼鏡を、目から離さない。)

男4 やあやあやあ、ははは、こんばんは。

女5 双眼鏡はずして。

男4 あっ、失礼、ずっとしてたもんで顔になじんで。

女5 顔に跡残ってるよ。

男4 チャームポイント。

男3 あの、こちらは？

女5 ああ、えっと…

男4 一言で言って、「ちょっと待った」だ。

男3 ちょっと待った？

男4 ずっと見ていたら今君が、僕と付き合ってくださいって手出したろ、そしたら、僕がちよっと待った！って言って、横に並ぶわけだ。

男3 あの、意味が…

男4 僕も今プロポーズ中なんだ！

男3 えっ！

女5 ちょっと、それは誤解、それはちゃんとお断りしたでしょ。

男4 そんなこと言ったら、今こいつのも断っただろ。

女5 そりゃ、だって。

男4 僕はまだ諦めてないんだ。

女5 ねえ、ちょっと泣かないでよ。

男4 泣いてない。

女5 もう3年も経つのよ。

男4 たった3年じゃないか。

男3 あの、えっと、紹介、って言うか、あらためて説明を。この人は一体？

女5 弟さん、前の私の夫の。

男3 お、弟？

男4 いや、それは忘れてくれ、今は君を愛する一人の男だ。

男3 つまり、あの、お兄さんが亡くなって、弟さんが今度は結婚したいと。

女5 絶対ダメに決まってるでしょ、警察が疑う理由がプラスされちゃうじゃないの、そんなこと。

男4 でも、それがなかったら、僕のこと、好きだって。

女5 だから、あんな、精神的にどん底の時に、あれだけ献身的に助けてもらったら、誰だって心グラグラに。

男3 落ち込んでるところをつけ狙って？

男4 人聞きが悪いな、僕は純粹に彼女を助けようと。

男3 下心を隠して。

男4 そう、下心を・・・いや違う、なんてことを言うんだ！

男3 あなたは警察には疑われなかったんですか？

男4 アリバイがあった助かった。

男3 そうですか、んー、あなたの登場で、最初ちょっと動揺しましたが、要するに、もう昔の、終わった関係ってことですね？

女5 ええ。

男4 終わってない！

女5 いえ、もう3年も前に。

男4 この3年間、ずっと近くで見守って。

男3 ストーカー？

男4 違う、迷惑が掛からないように、ちゃんと双眼鏡の距離で。

男3 それってやっぱストーカー！

男4 違う！ なんでそうなる、一応兄弟だぞ。

男3 あっ、さっきは弟じゃないって否定して、都合が悪くなると兄弟って。

男4 くそ、弁が立つやつめ、とにかく、僕は君ちゃんを陰ながら守るために、ずっと。

男3 でも今は、彼女には僕がいます。もう過去の人は、どうぞもうお引き取り下さい。

男4 過去じゃない、過去じゃないんだ、過去にしないでくれ、今も、今も、僕だけじゃない、君ちゃんの中には、まだ兄貴がいて・・・

男3 えっ？

女5 やだ、ちょっと紀一郎さん、何を。

男4 警察の話ネタに、いつもそれを理由に、最後には断って。僕の時も、今こいつの時も、前の時の、なんかふざけた名前のヤツの時も、イカ二貫だっけ、きつと兄貴のことを忘れられるんじゃないかって、付き合ってみて、でもダメで、その繰り返しで、そりゃ敵わないよ、兄貴には、死んじまったら、もう点数下がることないもんな、神様になられちゃ、そりゃ太刀打ちできない。でも、それでも、僕は諦めないって決めて。

女5 悪いけど、それがウザイのよ。言ったでしょ、ウザイって。私の心の中なんて、ぜんぜん分からないのに。

男4 でも。

女5 でもじゃなく。全部あなたの想像、もっと、私の中では、そんなハッキリした形のある感じじゃなく、あの人の思い出は大きいけど、別にそれに囚われていくわけじゃなくて、みんな、その時は、一緒にいる時は、そりゃ幸せだし、ただ、その先を望まれると、だって私、いつかなくなっちゃうんだし。

男3 ん？ いなく、なる？

男4 またそれを言う。

男3 一体、何の・・・

女5 分かんないけど、いなく、・・・月に帰るとか。

男3 月に？

男4 またかぐや姫。

女5 ね。ごめん、分かんないよね、私にも分かんないの。でも、あの話ってさ、かぐや姫、あれって、かぐや姫が主役じゃないんだよね。育ててくれた、おじいさんや、おばあさん。それに、物語の後半なんて、かぐや姫に求婚した沢山の男の人たちが、命がけで、なんか、無理難題をやり遂げようとして、亡くなった人ともいて。かぐや姫は、ただ、一方的に愛されて、あいつ何を考えているのか、ぜんぜん分からなくなってる、そういう人間はさ、結局どっか行っちゃうのよ、月とか、海の底とか、どうせ、消えちゃう存在って思うの。

男3 それが、自分だって言うの？

女5 うん、なんか、やっぱり勝手に愛されてる感じが、なんか異常だなって。

男3 違和感、とか？

女5 いずれ感じ。すごく。すごく。馬鹿みたいでしょ、かぐや姫に囚われすぎて。

男3 だと、したら、僕は、命がけで、あなたを手に入れようと頑張る男だって、そうなのじゃないですか。

男4 あっ、僕も、僕もです。

女5 えー、考えてよ、物語じゃないんだよ、まさか死ぬって分かって頑張る意味ないでしょ。

男3 そりゃ、死ぬってというのは、まあ遠慮しますが、でも気持ち的には、それくらい頑張れる気が。

男4 僕も兄貴を越えるには、命くらい投げ出すくらいの。

女5 だからそういう！死ぬなんて馬鹿だって言ってるの。馬鹿、すごい馬鹿、あなたのお兄さんも、私は何より馬鹿だって、そう思ってる。そりゃそうでしょ、私を残して死ぬなんて、この私を、あーもう信じらんない。馬鹿よ、最悪、死ぬって感じ。死んでるけど。今まで誰も愛さないで生きてきて、それが今度は、この人と一緒になって思ったらあっけなく死なれて、どういうこと？先に死ぬやつはみんなダメ、私の言ってる意味分かる？

男3 はい。

男4 僕も。

女5 先に逝く方が楽だなんて言わないけど、残された人の気持ちさがどれだけ。

男3 はい。

男4 すみません。

女5 なんであなたが謝るの？

男4 兄貴の代わりに。

女5 ね、そういうわけだから、今日の話はなかったことに、この箱も、悪いけど開けないでお返しします。紀一郎さんも、どうかもっと素敵な人を見つけて。

男4 いや、そう簡単には・・・

女5 本当、お願い。こんな大きい弟だけど、幸せになって欲しいわ、姉としてね。

男3 あの、ちょっとお聞きしますけど、月からの迎えは来ましたか？

女5 えっ？

男3 月からの迎え、まだですよね、なら、それが来るまでは、チャレンジしたいかなって。

女5 でも。

男3 いや、だってき、ここに3年も思い続けた人までいて、えー、ここで諦める

の？ お前の気持ちそんなもん？ って思っちゃって、急にここではい諦めまし

た、とはなりませんよ、そりゃ。もうちよつと、もうちよつと、考えるための時

間、いや、僕の事見ていてくれる時間を、僕に下さい。待ってますから。

女5 待ってられても、やっぱりノーかもしれないんだよ。

男3 そうかもしれないけど、でも先の事は分からないし。

女5 そうだけど。

男3 譲歩です。お互いに、ここは譲歩しましょう。

女5 ー、まあ、はい。

男4 分かりました。譲歩ですね。

男3 あなたは何をどう譲歩すると？

男4 ふっ、ふっ、ふっ。(双眼鏡を目に)

男3 わっ、双眼鏡かけた。

男4 今や目の一部なんだ。

男3 通報とかされないように気をつけて下さいね。

男4 大丈夫だ。

男3 心配だと思いませんか？

女5 本当、心配。

男4 えっ！

女5 じゃ、今夜は帰るわね、後はお二人で仲良く飲みなおして。じゃ。

男3 . . .

男4 . . .

(女5、立ち上がり、去って行く。残された、淋しい男2人 . . .
溶暗。)

■ 11・晴耕雨読

(. . .)

女1 またもや。

女2 またもや？

女1 ものの見事に何も起きないで終わったわね。
 女2 だって実際そうだったんでしょ？
 女1 ここまでモテ女じゃなかったけど。
 女2 いやいや。
 女1 ちよっと気になったから指摘していい？
 女2 えっ、何か事実とは違い過ぎたとか？
 女1 校正。
 女2 どこ？
 女1 方言よ。
 女2 方言か。
 女1 この、いずいって言葉は、東北とか、盛岡宮城でしか通じないわよ。
 女2 あっ、そっか。よく編集さんとかに直されるやつだ。
 女1 それと、だからしも、宮城でしか使われない言葉。
 女2 そうだね、そうだった。
 女1 あっ、それと。
 女2 まだあるの？
 女1 雨ばっか。
 女2 えっ？ ああ、でも最後の話は降ってなかったでしょ。
 女1 これから降るじゃない。
 女2 これから？
 女1 原稿用紙ってことは、まだ書きかけでしょ。
 女2 まあ、はい。
 女1 続きがある。そしてそこでは雨が降り始める。ずっと雨が降っている。
 女2 続きはどうなるの？
 女1 あなたが作家でしょ？
 女2 そうだけど。
 女1 そうね。友達が出るの。
 女2 友達？
 女1 すごくいい子、私の事すごい分かってくれる、大好きよ、それに、ああ何より、特別な力があってね、雨の日だけ、靈感が強くなって、普通なら見えない人が見えてしまう。
 女2 ……うん。

■ 12. 回想、現実の話、そして晴耕雨読の終わり

(音楽。)

「12の1」

(雨のピクニックの最後のほう、ただし、男1の立ち位置には、女2がいる。)

女2 あれ？ どうしたの？ 海の底だよ、人魚さん人魚さん、綺麗な魚が、ほら、たくさん……

（静寂。雨音だけが。）

女3 ……飛び込むと、思ったんでしょ？ さっき、雨の中、橋の上で、声を掛け

たのは、私が飛び込むんじゃないかって、心配して……

女2 ……あそこ、今まで何回か、そういうことがあって、危ない橋なんです。この辺に住んでいる人はみんな知っていて、事故か自殺か分からないけど、3か月くらい前にもそういうこと。なんか、なんか、どうしても、気になってしまった。

女3 もっと、もっと早くにあなたに見つけてもらいたかった。

女2 えっ？

女3 そうしたら私、あんなところから飛び下りなくっても良かったのにな。

女2 うん、そうだね。

女3 私ね、この間、体にガンが見つかったの。なんかね、ちよっと病状進んじやあって、微妙なんだよね、治るか治らないか。いや、医者にはね、先生は、大丈夫、手術で治せます、なんて言うんだけど、なんか信じられないって言うか。だってさ、なんか次々と親戚とか、もう十年近く会ってなかった従妹までお見舞いに来てさ、それってさ、かなりヤバいってことだなって、なんか、すごい追い詰められちゃって。それでね、逃げてきちゃったのね、病院から、衝動的よ、勢いで、手術を前に、病院を抜け出して。衝動的に、衝動的に、あの、橋の上から。

女2 間に合いたかった。私だって、間に合いたかった。こういう時、私、いつもそう思う。間に合ったら良かったのにな。

（女2、振り替えると路上、ベンチが。）

「12の2」

（ベンチに、男2が座っている。雨が降り始めている。）

男2 ええ、えつとですね、この物語は、そもそも、男が、僕みたいな、何の変哲もない男が、仕事帰りに駅からの道を歩いているところから始まります。いや、終わりますって言ったほうがいいかな。まさかさ、あんなもの持つてる人います？ 斧ですよ、ありえませんか。しかも、勝手に、僕がストーカーだって決めつけて、いやいや、帰る方向同じなだけですから、いくら言ってもダメで、僕も、逃げりゃ良かったんですけど、何とか分かってもらおうと、そりゃそうでしょ、違うんですから、間違えられたまんまじゃたまったもんじゃない。だから、一生懸命、説明してて、分かってもらおうと、分かってもらおうと。

女2 残念だけど、ニュースではね、あなたはストーカーを働いて、報復に遭って殺されたことに。

男2 ほらー、でしよう、最悪な死に方ですよ。

女2 私が、ちゃんとした名誉挽回にはならないけど、物語にして、本にするつもり。名前もちゃんとサイトウさんと。

男2 ええ、期待してますよ、本になったら、本になったら、絶対読みますから。

女2 ええ。ぜひ読んで。あなたの物語。

(女3と、男2が消え。元の部屋に戻る。)

「12の3」

(女2、急に動いて、用意してあった黒いコートを羽織って。)

女1 なーに、急にそんな恰好。

女2 月からの、使者です。

女1 月からの？

女2 原稿そこまでだから、続きが気になるでしょ？

女1 わっ、そういうコスプレ？ じゃこの話の続きは、本当に月から迎えが？

女2 そりゃそうでしょ、かぐや姫なんだから。宗像三女神(ムナカタサンジョシン)かぐや様、お迎えに上がりました。

女1 まさかまさか。

女2 本当です。

女1 私、神様になったのね？

女2 ええ。神様に。

女1 唐突にして、予期せぬ展開。

女2 いえいえ、本当は、心の奥底では覚悟をされていたのではないですか？

女1 覚悟なんて。

女2 逃げ遅れたと、悟った時とか。

女1 逃げ、遅れた？

女2 ええ。

女1 あそっか、意地悪ね、続きは、もう物語世界じゃないんだね？

女2 ……ええ。雨が降るたびに、あなたが出てきてくれて私嬉しかった。ほら、旦那に女作られて逃げられちゃって、一人になっちゃったからさ、私本当淋しくて、参ってからさ。なんか、あなたが現れて、友達になってくれて、なんか普通に一緒に暮らしているみたいでさ、私も助かったんだ、本当、あなたが現れてくれて、助かった。

女1 なんてだろうね？

女2 ね、なんでだろ。

女1 不思議。

女2 気が合ったのかな？

女1 それだけ？
 女2 重要でしょ、それって。
 女1 そっか、そうだね。

女2 あなたがどこの誰か、調べたんだよ。あの大地震の後、津波に流された場所で、あなたがどこの誰か、調べたんだよ。あんなに流された場所で、あなたみたいな、年齢とか、いろいろ。そしたら、事務所のビルごと飲み込まれた魚協があつて、なんか、あなたと年代が近そうな女の人もいて。

女1 私は・・・、言ったでしょ、私がかぐや姫よ。

女2 ふふ、そうだったね、ねえ、あなたに求婚してた人たちはどうなったの？

女1 ・・・・（首を振る）

女2 そう。

女1 月に帰っちゃった身としては、もう知る由もない。

女2 うん、この話を書き上げて、本にしたらさ、見つかるかな、その人たち。

女1 どうだろうね。もしもあの時生き残っていたとしても、もう何年も昔の話じゃない、他にいい人見つけて、家族作ったりしてさ、そうなるのが私の望み。

女2 うん。そうだね、そのほうがいいわね、きつと。

女1 かぐや姫でね、求婚してきた何人かは、かぐや姫が求めた無理難題を、ニセモノ作ったりしてさ、嘘で切り抜けようとして失敗したの。

女2 そうだっけ。

女1 そ。まあさ、みんなろくでもないヤツばっか、かぐや姫を好きになる奴ら。

女2 （笑）そうかもね。

女1 ねえ、あのさ、コーヒーもう一杯もらっていい？

女2 ビールじゃなく？

女1 ーん（考えて）、いえ、コーヒーで。

女2 うん、待ってて。

（女2、コーヒーを入れるに。

鈴の音。女1、何もいない場所に手を伸ばし、まるで猫の頭をなでるように、ゴロゴロ鳴る首をくすぐるような動作をする。そんなことをしながら、会話は続く。）

女1 あーあ、今日の晴耕雨読は楽しかった。

女2 （声）えっ、雨、上がるの？

女1 うん。天気予報見たんではよ、この後しばらく快晴よ。

女2 （声）そっか、じゃ、畑耕さないと。

女1 ははは。ねえ、狙ってたでしょ。

女2 （声）狙って？

女1 朝から、今日はこの話してやろうと。

女2 （声）ああ、うん、そうだね。なんかさ、いつかは、色々はつきりさせないとさ。

女1 成仏できないとか？

女2 （声）いや、そういうのとも違うけど。

女1 もしもう私が出来なくなったらさ、それは月に帰ったってことだから、見上げてね、満月の夜とか、夜空を。

女2 (声) そんな、淋しいこと言わないでよ。

女1 ははは、じゃ、言わない。

女2 ねえ、景色見えるかな？

女1 うん。もうそろそろだね。

(女2、コーヒーを入れて帰ってくる。)

女2 お待たせ。

(部屋には誰もいない。)

女2 あー、間に合わなかったか。

(カーテンを開ける。外は晴天。)

女2 ……今夜は、満月かなあ。

(部屋に差し込む陽の光。)

終わり。

2023年初夏*雨々アメ(飯)メ